

埼玉親善大使レポート

氏名：A.N.

留学先：アメリカ・ウィスコンシン州

【埼玉県をPRした事柄】

埼玉親善大使として、まずは身近な友人に狭山茶を配ることから埼玉のPRを始めた。緑茶自体は“green tea”としてアメリカでも広く知られていたが、狭山茶自体や埼玉県について知っている人はほとんどいなかった。また、「埼玉 (Saitama)」という単語自体は、アニメの影響でキャラクターの名前として認知されているケースが多く、地名としてよりも先にそちらのイメージで反応されることが度々あった。しかし、そこから話を広げて説明することで、かえって埼玉について興味を持ってもらいやすくなった。このような日頃の小さな行動や会話は埼玉を知ってもらうための効果的なきっかけになったと感じている。

加えて、大学内で週に一度行われる「日本語テーブル」に、1年間を通して継続的に参加した。日本文化に興味を持つ学生や日本語学習者が集うこの場は、単発のイベントとは異なり、参加するメンバーと信頼関係を築きながらじっくりと埼玉の魅力を伝える貴重な機会となった。特に力を入れて紹介したのは、幸手の桜並木、秩父・長瀨の豊かな自然、そしてさいたまスーパーアリーナである。東京や京都といった日本の代表的な観光地に注目が集まりがちの中で、埼玉ならではの自然の美しさやイベント施設の規模の大きさを知ると、参加者たちは一様に驚いた表情を見せ、興味を持ってくれた。日本語テーブルに集う学生の中には将来日本への留学や旅行を計画している人も多く、その際にはぜひ埼玉にも足を運んでほしいと繰り返し伝えた。継続的な発信を通して、単なる紹介にとどまらず、「いつか訪れてみたい場所」として埼玉を記憶してもらえたことは、大きな手応えであった。

【現地での生活、風土、文化、歴史、国民性など】

留学先のウィスコンシン州は、アメリカ中西部の北部に位置し、冬の寒さが非常に厳しい土地である。氷点下 20℃まで気温が下がる日もあり、日本で経験してきた寒さとは比べものにならないほどの厳しい冷え込みに、当初は身体が慣れず苦勞した。しかしその厳しさの中で目にする一面の雪景色は非常に美しく、凍りついた木々や真っ白なキャンパスの風景は、日本では味わうことのできない自然の表情として深く心に残っている。長い冬を越え、暖かさが感じられるようになる春先には、キャンパスの芝生の上で友人たちとピクニックをしたり、ただ寝転がって空を眺めたりと、季節の移ろいを全身で楽しむ穏やかで美しい日々を過ごすことができた。

生活面では、大学の寮で2人部屋の生活を送った。ルームメイトとは同じ部屋で長い時間を共に過ごす中で自然と会話が増え、深い絆を築くことができた。留学の終わりに彼女と別れなければならなかったときは、涙が出るほど寂しい気持ちになった。この出会いと

別れの経験は、留学生活の中でも特に心に残る出来事のひとつである。

食事については、学校のミールプランを利用し、毎日食堂やカフェで過ごした。しかしメニューはバーガーやポテト、ピザといったものが中心で、正直なところ口に合わないことが多く、体調にも影響を感じることも多々あった。この経験を通して、栄養バランスの取れた日本の食事がいかに恵まれたものであるかを、離れて初めて実感することとなった。幸いキャンパスの近くにはアジア系レストランがいくつかあり、味覚が恋しくなったときにはよく足を運んでいた。

国民性については、アメリカの人々は総じてオープンで、自分の意見をはっきりと持ち、それを臆することなく主張する文化があると感じた。日本のように空気を読んだり、譲り合いを美德としたりする文化とは大きく異なり、最初はその率直さに戸惑うことも少なくなかった。しかし授業などで議論を重ねたり現地の友人と過ごしたりしているうちに、自分の考えを率直に言葉にして伝えることの大切さを次第に学んでいき、以前よりも自分の意見を持ち、発信できるようになったと感じている。



【自身の活動に関すること】

私は社会科学を専攻しており、留学中はエスニックスタディ、ジェンダースタディ、ビジネスなど、幅広い分野の授業を履修した。中でも印象に残っているのは、Workplace Diversity and Equity と Intercultural Communication という2つの授業である。

Workplace Diversity and Equity の授業では、ビジネスの現場において多様性がどのように良い方向にも悪い方向にも作用しうるのかを、具体的な事例を通して学んだ。多様な背景を持つ人材が集まることでイノベーションが生まれる一方、コミュニケーション不足や無理解から摩擦が生じ、マイノリティとされる立場の人々が不利益を被ってしまう現実についても知ることができた。また Intercultural Communication の授業では、国際化が進む

現代社会において、文化的背景の異なる人々同士がどのようにコミュニケーションを取り、どのように互いに譲歩し合うことが望ましいのかを、理論と実践の両面から学んだ。

アメリカのキャンパスには実に多様な人種やジェンダーの人々が共に学び生活しており、それぞれが自分自身のアイデンティティに誇りを持って堂々と存在している姿を目の当たりにした。日本での生活では意識することの少なかったこの感覚を、留学生活の中で初めて強く実感することになった。

アメリカは世界でも有数の移民大国であり、その豊かさの一方で、移民をめぐるさまざまな社会的課題も現実として抱えている。そうした社会の中で実際に学び、生活したからこそ、日本にいただけでは得られなかった視野で世界に目を向け、「本当の多様性とは何か」ということについて深く考える機会を得ることができた。授業で学んだ理論と現実とが結びついたとき、多様性という言葉の重みをより深く理解できたように思う。

【最後に】

この 1 年間の留学で得たものは、語学力や専門知識だけにとどまらない。多様な価値観を持つ人々と生活を共にし、自分自身のアイデンティティと真剣に向き合ったことで、物事を一つの視点だけでなく多角的に捉える力を身につけることができた。厳しい冬の寒さも、自国と違う食事、慣れない文化の中での戸惑いも、すべてが今の自分を形作る貴重な経験となった。

留学中、移民問題は遠いアメリカだけの話ではないということにも気づかされた。日本にも、そして埼玉にも、外国にルーツを持つ人々や、異なる文化的背景を持って暮らす人々が確かに存在しており、移民や多様性をめぐる問題は決して目を背けることのできないものである。少子高齢化が進む日本において、今後ますます多くの外国人材が社会の中で共に生活し、働いていくことになるだろう。そうした未来を見据えたとき、Workplace Diversity and Equity や Intercultural Communication の授業で学んだ「どのようにコミュニケーションを取り、どのように譲歩し合うのか」という視点は、埼玉や日本の将来を考える上でも欠かせないものだと感じている。

帰国後は、この留学で培った視点を活かし、埼玉が持つ豊かな自然や文化、多様な魅力を国内外へ発信するとともに、様々な背景を持つ人々が互いを尊重し合える地域づくりに、自分なりの形で貢献していきたいと考えている。

